

BSSCにおけるチャンピオンスポーツの現状と課題 —学生スポーツを考える—

1. 女子駅伝チームを例に

渋谷 俊浩¹⁾

A Case of BSSC Women's EKIDEN Team

Toshihiro SHIBUTANI

Key words：競技スポーツ，競技力向上，女子駅伝チーム，コーチング

1. はじめに

日本で始めて大学名に「スポーツ」を冠した「びわこ成蹊スポーツ大学」は、今年で開学7年を迎える。これまで、我々は競技スポーツ学科を中心に「トレーニング・健康」「コーチング（旧コーチング・技術）」「スポーツビジネス（旧マネジメント・情報）」「スポーツ情報戦略（2007年度～）」といった、様々な視点・切り口から「競技スポーツ」の発展に取り組んできたが、残念ながら本学の競技スポーツに対する「指針（ポリシー）」は、明確に定まっているとは言い難いのが現状である。

前述の取り組みの一貫として、2003年の開学当初から「特定競技の強化」が行われてきている。具体的には、「男子サッカー・女子駅伝の強化（2003年～）」、次に「女子テニス（2005年～）・女子バレーボール（2005年～2006年）の強化」、さらには2007年からの「指定種目（男子サッカー・陸上競技・硬式テニス・バスケットボール・公式野球・柔道・女子水球・バレーボール）の強化」などが挙げ

られる。ここで注意したいのは、本学における「強化」とは、（学生アスリートの競技力向上へ向けての）①入学試験における優遇制度、②専任指導者の配置、③スポーツ施設の優先使用、④教育振興会・学友会・課外スポーツクラブ後援会等からの資金援助における優遇処置の4点であって、他大学で散見される特待生制度（受験料・入学金・授業料等学費の減免措置、栄養費などの強化費支給、ウェア・シューズ等の消耗品・物品支給）とは一線を画すものであることを念頭に置き、今後の論を進める必要があるということである。

本稿では、これら多くの事例の中から「女子駅伝チーム」の取り組みを振り返り、その結果を客観的に分析することによって、本学の競技スポーツへの取り組みについて、さらには本学における学生スポーツの現状と課題について検討していく。

2. 大学女子駅伝について

2009年度全日本大学対校女子駅伝競走大会（通称：杜の都駅伝，6区間39km）は、10月25

1) 競技スポーツ学科

日（日）に宮城県仙台市で開催され、過去幾度となく2位に甘んじてきた関西地区代表B大学が、4連覇を狙った同じ関西地区代表のR大学との激戦を制し、見事初優勝を飾った。また、同大会では関西地区代表K大学も上位入賞し、次年度の本戦のシード権を獲得するなど、歴史的に見ても関西地区代表校（毎年6～7チーム出場）は顕著な活躍を続けている。

全国大会に出場するためには、毎年7～9月に全国8地区で行われる予選大会を勝ち抜かなければならない。さらに、各地区には登録大学の数、及び前年の全国大会における地区代表の活躍度（総合順位）などによって出場枠（1～10校）やシード校が予め割り振られている。

関西地区予選は、1999年から兵庫県神戸市の「神戸しあわせの村（6区間30km*）」で実施されている。ここは1周2.8kmの起伏に富んだ周回コースであるため、通常のトラックレース（フラットなコース）におけるスピードに加え、体力的・精神的なスタミナ・タフネスが要求される、女子選手にとって難易度の高いコースとされている。このようなコースコンディションに加え、前述のような全国大会での関西地区代表校の活躍があいまって、近年の関西地区予選は全国で最もレベルが高く、7つの出場枠（内3つはシード校であるため、実質は4つ）をめぐる毎年熾烈な戦いが繰り返されている。

* 1区3.9km - 2区3.3km - 3区6.5km - 4区6.5km - 5区3.3km - 6区6.5km, 計30km

3. 関西大学女子駅伝大会 結果の分析と考察

3.1 総合4位～10位チームの動向

図1～13は、本学チームが初出場した2004年度大会から2009年度大会までの、すでに全国大会出場権を持っているシード校3校を除いた総合4位から10位（＝競技力的に見て全国大会出場枠残り4つを巡る戦い）に加わる可

能性が高い順位）チームの順位・記録（総合・各区分）の推移を示したものである。

各年度の順位変動（図1～6）から、次の2つの共通する傾向があることがわかる。

①2区（3.3km）と3区（6.5km）、特に3区での順位変動が大きい。

②7位以内（全国大会出場条件）のチームに関しては、4区以降ほとんど順位変動は無い。

つまり、これらのデータは、1区で出遅れたとしても、2区や3区、特にエース区間といわれる3区に競技力の高い選手を配置しているチームは挽回が十分可能であるが、そうでないチームは前半で出遅れると、4区以降での挽回は不可能に近いということを如実に示している。

また、総合記録及び各年度の区分記録の推移（図7～13）からは、次の2つの共通する傾向があることがわかる。

①緩やかではあるが、年々記録（タイム）は向上する傾向にある。

②年々下位チーム（10～8位）と全国大会出場チーム（7～4位）のタイム差、及び区分下位選手と上位選手とのタイム差が小さくなってきている。

これらのデータは、出場選手の競技力は高いレベルで年々向上しているため、各区分、特に後半区分（4～6区）におけるわずかなミス・タイムロス（ペース配分・かけひきなどの戦術上のミス、体調不良によるブレーキなど）が、チーム成績（総合記録）に大きな影響を与えてしまうということを示している。

以上のことから、関西地区において「予選を突破して全国大会へ出場する」ためには、6区分全ての選手が普段の実力どおりの走りをするのが絶対条件であり、失敗は許されないのである。

3.2 本学チームの動向

表1に、前述したスポーツ推薦部員を含む

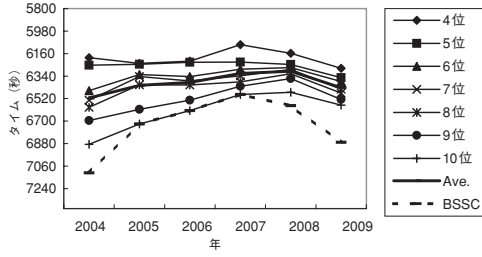


図1. 総合記録の推移

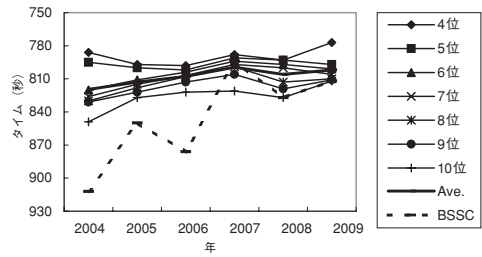


図2. 1区 区間記録の推移

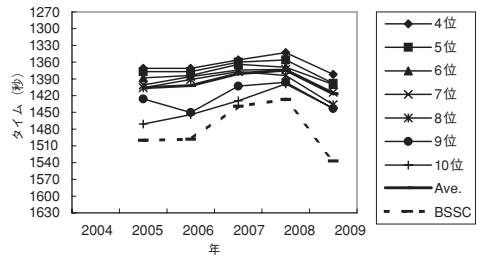


図5. 4区 区間記録の推移

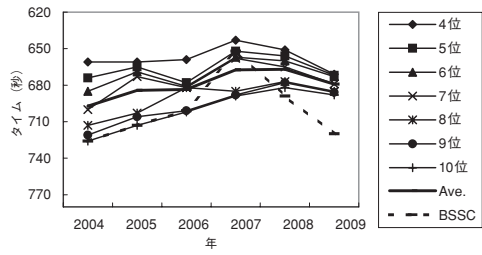


図3. 2区 区間記録の推移

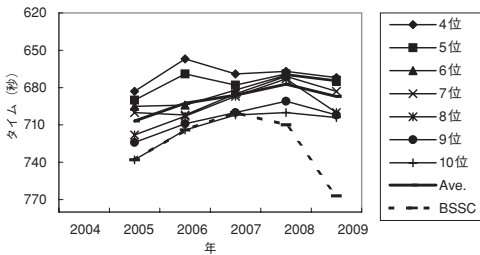


図6. 5区 区間記録の推移

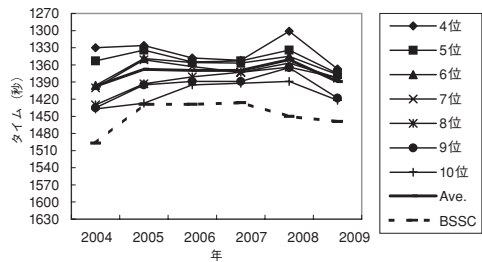


図4. 3区 区間記録の推移

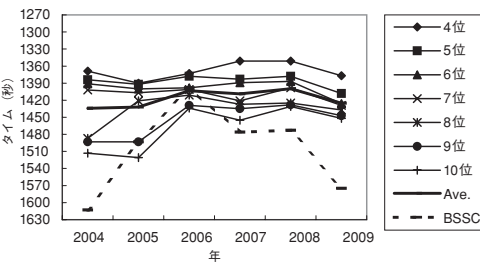


図7. 6区 区間記録の推移

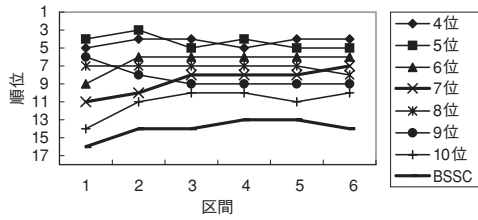


図8. 2004年 順位の変動

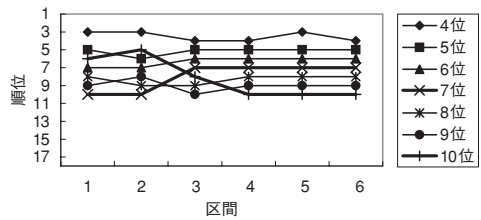


図11. 2007年 順位の変動

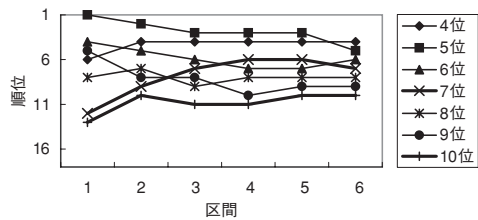


図9. 2005年 順位の変動

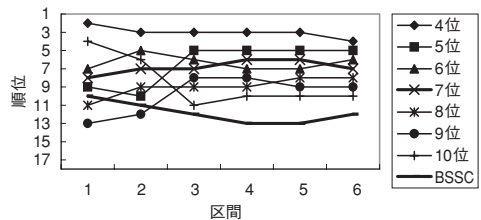


図12. 2008年 順位の変動

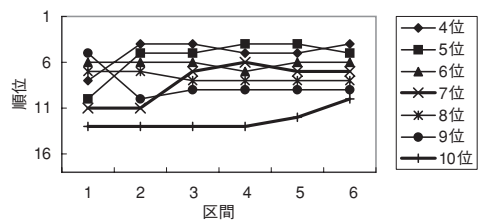


図10. 2006年 順位の変動

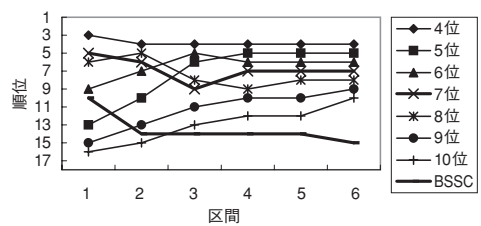


図13. 2009年 順位の変動

表 1. 駅伝チームの構成と成績の推移

	新入 スポーツ推薦部員	駅伝対象部員 (スポーツ推薦)	関西予選出場 スポーツ推薦部員	関西予選成績 (順位・記録)
2003	4	9 (4)	—	—
2004	3	9 (5)	4	14位 1.58.35*
2005	2	12 (6)	4	10位 1.52.03
2006	2	12 (7)	4	10位 1.50.16
2007	1	9 (7)	4	10位 1.48.07
2008	0	9 (4)	3	12位 1.49.36
2009	0	5 (3)	4	15位 1.54.30

*別距離

本学駅伝チームの構成と成績の推移を示した。

2003年の創部年、駅伝対象部員9名（内スポーツ推薦4名）とすでに選手数は充足していたが、「競技力が不十分である」と判断して出場を見送ったため、本学チームは2004年度から関西地区予選に参戦した。

1・2年生で臨んだ初出場の2004年度大会は、過去（高校生時）の主要大会での経験不足に加え、ウェイトオーバー等が原因のトレーニング不足のため、出場19チーム中14位と、全く予選会突破争いに参加できなかった。

初出場の反省をふまえ、有望新人の加入・夏期強化合宿の増強を図って取り組んだ2005年以降は、前半区間では上位争いに加わるなど、全国大会出場（7位以内）をはっきりと視野に捉えることのできる、発展と充実の期間となった。特に2007年度大会は、1区が先頭グループとわずかの差の6位で繋ぎ、2区で上位の見える5位へ浮上（1・2区ともにスポーツ推薦で獲得）と、ようやくスカウト活動の成果が現れた大会であった。しかしながら、一方では長距離区間（6.5km）の3・4区での上位争いからの脱落（実力不足・ブレイキ）など、エースの不在とチーム内の競技力格差が大きいという、本学チームが抱える最大の課題を露呈した大会でもあった。

これまでも、安定して有望な新人を勧誘することと総合力を充実させる（競技力の底上げと向上）ことは、創部以来本学チームの命題として取り組んできたことであったが、勧誘の失敗（2007年度は1名、2008・2009年度は0名）や長距離を志望する女子選手の減少（本学全体の女子学生の減少）、メンタル面の問題（バーンアウト、意欲の低下）、サポート体制の不備（活動資金、コーチング方法）等を未だに改善することができず、2008・2009年度とチームの競技力は低下の一途をたどっている。また、現在のところ2010年度もスポーツ推薦での新入部員は1名（競歩兼長距

離）で、スポーツ推薦以外（公募推薦入試・一般入試）からの入部希望者がなければチーム全体の人数も4名程度（駅伝チームは6人必要）と、パート自体の存続も危うい状況である。

4. 今後の展望と課題・提言

以上、大学女子長距離界の動向と本学チームの現状を踏まえた場合、加えて今年度びわ湖大学駅伝大会を予選落ちした本学男子駅伝チームの置かれている状況を考慮すると、2010年度は駅伝に対する取り組み方を大きく転換する可能性も視野に入れた、極めて重要なターニングポイントの年となることはほぼ間違いない。

そこで、本稿の結びとして現在明らかになっている本学男女駅伝チームの課題を列挙し、それらについての改善方策を検討しつつ、併せて本学競技スポーツ（主に課外スポーツクラブ活動）のさらなる発展を祈念しての提言を行いたい。

〔本学男女駅伝チームの課題〕

- ①明確かつ具体的な強化計画の立案（短期・中期・長期計画を明示、目標の数値化、情報の公開）とアスリート・スタッフへの周知徹底
- ②安定・継続的な有望新人の獲得（広報・スカウト活動の強化、入試方法の再検討）
- ③サポート体制の見直し（トレーニング・コーチング方法の再検討、スタッフ・施設の充実、活動資金援助の増強、外部資金の獲得、学習支援体制の構築）
- ④学習態度・日常生活態度の改善と充実を含めたアスリート教育の実施（トップアスリートクラス編成の検討、競技活動＝クラブ活動の単位化、コーチングスタッフとのコミュニケーションの緊密化、合宿所・学生寮設置の検討）

〔本学競技スポーツへの提言〕

提言の前に、ここで一考しておくべきことは、前述の課題①～④などは本学の一競技団体、あるいは競技スポーツに取り組んでいるあるひとつの大学に限った問題ではなく、国際競技力の停滞・低下などに悩むわが国の競技スポーツ全体が抱えているものと同じだということである。つまり、例を挙げるならば、北京オリンピックをはじめ近年の国際主要大会において惨敗を続ける「日本男子マラソン」の復権を果たすためには、選手個人・スタッフや特定のチームの奮闘だけでは全く不十分であり、陸上競技を統括する日本陸上競技連盟はもちろんのこと、さらにはJISS・NTCとの連携といった国家レベルのサポートが必要不可欠であるのと同様に、本学の競技スポーツが今後より一層発展していくためには、各クラブや学生と教職員、様々な研究領域などが協力・連携することに加えて、大学が責任を持ってサポートすることが非常に重要なのである。

冒頭にも述べたように、開学して7年が経つ今も、本学の競技スポーツに対する明確な「指針（ポリシー）」は定まっていない。また、「少子化等が原因による受験生の減少」「学生の質の変化」等、今後克服していかなければならない課題・問題は山積している。その一方で、オリンピックやユニバーシアード等の国際主要大会出場、日本選手権や日本インカレ等の国内主要大会優勝・入賞等に代表されるように、現場レベル（学生アスリート個々及び各種目）での本学の競技力は着実に向上し続けている。厳しい状況の中であって

も、現場は日々頑張っているのである。

しかし、スポーツ大学としては、いつまでもこのような現場の奮闘に頼り、その成果を甘受しているだけであってはならない。スポーツを標榜した日本初の大学として、競技スポーツ学科を設置し、コーチングコースを中心として学生及び社会に「チャンピオンスポーツの意義」を説く以上、教育研究成果の具現化、すなわち「競技力向上」は我々にとって必須の命題である。ぜひとも、びわこ成蹊スポーツ大学が一丸となって、真剣に競技に取り組むことを望みたい。

まずは、「勝つ」こと。そして、「勝ち続ける」のだ。

参考・引用文献等

- びわこ成蹊スポーツ大学 自己点検評価委員会
(2005, 2007, 2009) びわこ成蹊スポーツ大学
自己点検・評価報告書 2003-2004,
2005-2006, 2007-2008.
- 関西学生陸上競技連盟 ホームページ
日本学生陸上競技連合 ホームページ
日本陸上競技連盟 (2009) 競技者育成プログラム
- 渋谷俊浩 (2005) 競技スポーツにおけるコーチングの現状と課題－全日本大学女子駅伝対校選手権大会出場への取り組み, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 第3号: pp.23-26.
- 渋谷俊浩 (2006) 記録の推移から見た大学女子駅伝競技の事例的研究－全日本大学女子駅伝対校選手権大会出場へ向けて, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 第4号: pp.113-122.